

祈禱を捧げる爲に寺内の塔に上つたが、其の時雪の如きものが降つて來るのに氣づいた。祈禱果て、塔を出ようとした時に、入口の戸が塞がつて動かない。再び塔上に上つて外を見ると、一面に沙が降つて居るのであつて、既に全城悉く埋まつて居つた。僅に此塔の上の方だけが埋もれずにあつたので、そこから飛び下りて纔に脱するを得たといふのである。ともに敘述の間に甚しき誇張の跡のあるのは明かなことであるが、沙土の侵入といふ自然の現象が、常に住民の恐怖する所となつて、遂にはこれが宗教宣傳の爲の一材料にも用ひらるゝに至つたものである。火山の噴火に依る場合のやうに、急激の瞬間に或る町が埋没されたものとは思はれないが、それにしても古來多くの町は、かくて沙中に葬られて居る譯である。然るに此の地方は一帶に空氣は乾燥し、降雨の量は少いのであるから、一旦沙中に入つたものは、特別の事情の外濕氣の爲に朽壞すること稀であつて、物の貯藏場としては天與の恰好の場所ともいへる。されば埋もれた古跡にして、若しその場所が卜知し得らるゝならば、沙土を排除して其の下に眠れる千古の文化を索むることの可能なるは何人にも想像し得らるゝ所である。

### 三 遺跡の紹介

假令數に於て大して多數で無くとも、兎も角も一團の民衆の群居した町なり村なりが、すべての所有を携へて地下に葬り去られるといふことは、住民自身に取つては慘憺たる一大災厄であらねばならぬ。されば埋没の事實の起つた當時は勿論のこと、以後に於ても、その事實は自ら厄を被つた人、もしくは、其の近傍の人々によつて語り傳へらるべき筈である。かくて幾分か地上に隆起を生じて居る場所の如きが、その傳説の遺跡と傳へられたり、更に